様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２０ 日現在

機関番号：３７１０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２１００９

研究課題名（和文）フィリピンにおける日本人移民の先住民族社会への適応とそれが与える影響

研究課題名（英文）Adaptation process of Japanese immigrants to the indigenous peoples' communities and it's impacts on their cultures in the Philippines.

研究代表者
森谷　裕美子（MORIYA, Yumiko）

九州産業大学・国際文化学部・教授

研究者番号：４０２２１７０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　4,000,000円、（間接経費）　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日系人のフィリピン・ルソン島北部での移住社会への適応過程に関する実証的研究であり、ここでは戦前、多くの日系人が先住民族社会に定着していたが、そこで彼らがどの様に受け入れられ、それが相互の文化にどの様な影響を与えたかについて分析を行った。その結果、その社会的背景によって日系人の生活実態や先住民族との関係性が大きく異なり、日系人社会が極めて多様であることが明らかになった。またその際、先住民族を母とする複数の属性を持った2世が多く生み出されたが、彼らは歴史に翻弄されながらも幾つかの属性の中から自身の社会的、文化的文脈に応じてそのアイデンティティを選択し、変容させてきたということが分った。

研究成果の概要（英文）：Before Pacific War, the number of Japanese immigrated to the domain of indigenous peoples in Northern Luzon, Philippines. I examined the adaptation process of the Nikkeijin(Japanese immigrants of pre-Pacific War and their descendants) to the indigenous peoples'communities, and it's impacts on their cultures. The results suggest that historic experiences of the Nikkeijin vary according to their social background, especially about real life situation and relationship with indigenous peoples. I also found, the Nikkeijin intermarried with indigenous peoples and many mestizos were born who have dual identity. But after the war, they changed their Japanese names for fear of retaliation by Filipino. Most of Japanese identities have lost at that time and they lived as Filipino. But now they recovered their Japanese identity because they can receive the help and go to work to Japan as Japanese. So they can change and transform their identities depending on their social and cultural context.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学

キーワード：日系人　先住民族社会　フィリピン

１．研究開始当初の背景

1980 年代後半から、現代社会は「人の移動の時代」に入ったといわれる。こうした人の移動は、とりわけ 20 世紀後半から 21 世紀にかけて複雑化しているが、今やそれが、さまざまな社会問題や摩擦を引き起こしているのは言うまでもない。日本もまた、移民人口は少なくとも、多くの外国人が労働者として働いているという現状・実態があり、今ここで、こうした多様な移民問題の実情を把握し、それを経済的な側面だけでなく社会的影響と併せて考察することは、我々にとって、グローバル化された世界の今後の見通しを立てるうえで、きわめて重要な意味を持つ。

実はこうした国際移動は 19 世紀末ごろにすでに始まっており、当時は、日本もまた移民の供給源として重要な役割を果たしていた。しかし現代に生きる日本人の多くはそれを忘れてしまっているか、たとえ知っていても、それはアメリカやハワイ移民などに関する断片的な知識に過ぎないことが多い。これにたいし実際の移民たちは、それぞれに移住先となった地域社会で異なる経験をしてきたのであって、今日のさまざまな移民問題を考えるうえで、そうした事実を正しく知ることはもちろん、これら日本人移民の世界が移住先の環境や社会、経済、文化とどのように交差したのかを多面的に研究し、その存在を多次元的に意味付けることは、これまで以上に重要なものとなるだろう。

２．研究の目的

移民研究においては、移民の送り出し地域の分析に焦点を置くものと、移住先での現地社会への適応過程をその対象とするものの 2 つに大きく分かれるが、とりわけ後者は移民研究の伝統的な関心分野であってその基礎的な部分をなしており、こうした基礎的な研究の積み重ねによってこそ、初めて、国境を越えた地域ごとの適応状況の共通点や相違点を比較し考察することが可能になると言える。そこで本研究では、これまでの移民研究の中心であるアメリカやハワイとは異なるフィリピンの事例を現地社会への適応過程から分析することで、多様な移民問題の実情を明らかにしたい。

フィリピン日系人社会が他の日系人の社会と大きく異なるのは、フィリピンでは太平洋戦争によって、それまで大いに栄えていた日系人社会がことごとく破壊されてしまったということ、しかも、それに続く混乱によって日系人たちが極度の貧困に喘いだり、出自を隠して暮さなければならなかったりしたという点である。戦前の日本人の移住先のひとつであるフィリピンへの最初の集団的な移住は、1903 年の、アメリカ植民地政府によるルソン島北部のベンゲット道路の建設に携わるために渡比した「ベンゲット移民」と呼ばれる人たちであるが、その後、明治から太平洋戦争の敗戦時まで 5 万人以上の日本人がフィリピンへ渡ったと言われている。こうしたフィリピンの日本人移民社会の特徴は、日系人と現地社会の人々との間に比較的良好な関係が築きあげられていたということで、とりわけ現地のフィリピン人と結婚し、そこで子どもをもうける日系人の比率が高かった。特に、ベンゲット道路の完成で職を失った移民や、発展を続けるベンゲット州の州都バギオにさらなる職を求めて渡ってきた移民たちの多くが北部ルソンで農業に従事し、ここへ仕事を求めてやってきた先住民族の女性と結婚しており、いっぽう、さらに奥地の山岳地域に移って学校や教会建設に携わったり、商業に従事したりする者もあったが、彼らもまた、多くが先住民族の女性と結婚した。これにたいし、バギオでは商業に従事する日本人が多かったが、彼らのほとんどは日本人妻ないし家族を本国から呼び寄せ、日本の生活をほとんどそのままバギオに持ち込んだという。

かくして多くの日本人が北部ルソンに渡り、そこで生活の基盤を築き、ここで日本人社会が発展したが、太平洋戦争の勃発はこれら日系人とその家族たちに大きな打撃をもたらすことになり、とりわけ、戦後フィリピンに残された２世たちの多くは、反日感情の激しいフィリピンで「日本人の子」という出自を隠し、日本名をフィリピン名に変え、フィリピン人として生き延びなければならなかった。

本研究では、このような状況のなかで、最初の日本人移民やその子孫である日系人たちが「移民」として現地でどのような暮らしをし、どのように移民先に定着していったのかについて、その生活実態から明らかにするが、その際、これを定着先の人々の視点から捉えることにその特徴がある。すなわち、日本人がフィリピン・ルソン島北部の先住民族社会に深く浸透していったという事実に注目し、そこで先住民族の人々が彼らをどのように受け入れ、それが相互の文化にどのような影響を与えたかについて社会的、文化的側面から分析し、その変容を通時的に捉えることで浮き彫りにする。そして、もっぱらアメリカ研究、ハワイ研究として行なわれていた日系移民研究を、他の地域と異なる特徴を持つフィリピンを対象とする実証的な研究を行うことで、多様な移民問題の実情を把握し、グローバル化された世界の今後の見通しを立てるための提言を行うことが本研究の目的である。

３．研究の方法

筆者はこれまで、本研究の対象である北部ルソンの先住民族社会、とりわけマウンテン州に住むボントック族の社会についての民族誌的研究を継続して行ってきた。本研究では、そうした筆者のこれまでの知見をもとに、先住民族の社会に日系人がどのように適応し、また、そこに日系人が加わったことでそ

こにどのような文化変容がもたらされたかについて、これを通時的に捉えることで明らかにしている。またそれと並行して、かつての日本人コミュニティの中心地であったベンゲット州のバギオでの調査を行い、それをマウンテン州の事例と比較することによって移民問題の実情を捉えた。

具体的な方法としては、①日系人の入植の歴史、②バギオにおける日系人社会、③マウンテン州の日系人社会、④日系人のアイデンティティの４つの側面に注目し、そのうち①については、主としてフィリピンサイド、日本サイドの双方からその歴史資料にあたり、整理した。②については、北ルソン比日友好協会をベースに、バギオ周辺の先住民族集落およびバギオの町で暮らす日系人とその子孫とが歴史的にどのような経験をし、そして今、どのような生活をしているかについて、彼らの手元に残された資料の収集や、関係者へのインタビュー調査、さまざまな行事等への参与観察を通して明らかにした。③については、筆者の主たる調査地であるマウンテン州で、最初の移民である日本人やその子孫たちが先住民族社会にどのように適応し、そこにどのような文化変容がもたらされたかを、主として日系人および先住民族の人々へのインタビュー調査、およびさまざまな行事等への参与観察を通して明らかにした。いっぽうこうした調査の過程で、同じ日系人といってもその生活環境や周囲の状況によって「日系人としてのアイデンティティ」が大きく異なることが明らかになったため、④について、親の故地である日本を訪れることでそのアイデンティティがどのように変化するかを分析するため、実際に日系 2 世と 4 世の日本行に同行し、それを観察した。なお②については、両親とも日本人で戦後帰国した人々と、母親が先住民族で北部ルソン在住の日系人との比較研究を行ったが、③については、両親とも日本人の日系人はごく僅かであったため、その消息がつかめず、母親が先住民族の日系人の調査にとどまった。

## ４．研究成果

以上の研究調査から、主として以下の 3 点が明らかになった。

### (1) 日系人社会の歴史的な経験の相違

ルソン島北部の日系人の歴史のなかで、実際にベンゲット道路の工事にかかわったベンゲット移民と、その後のバギオの発展にともなって成長した日系人社会の日系人たちの歴史的な経験のあいだには大きな相違がある。すなわち「ベンゲット移民」と一括りにされる北部ルソンの日系人の歴史については、両者の語りに明らかな温度差や乖離があり、手記を読む際にもその点についての注意が必要であって、史実にたいし、彼らが自身の経験や歴史をどのように語っているかを検証することが、この地の日系人社会を理解する上でいかに重要であるかが明らかになった。また、バギオの町の中心部で商売を営み、あるいはその周辺で大規模な農業経営を行うことで豊かな暮らしを手にした人々と、貧農出身者が多いベンゲット移民や、鉱山会社に雇われた労働者、家族単位の比較的小規模な農業経営に従事していた人々とを比較すると、そこには明らかな経済的格差が見られる。いっぽう、これを現地の先住民族との関係でみれば、後者のほうが、より彼らと密接した人間関係のなかで同じような社会生活を行っていたことがわかる。そういった面でも北部ルソンの日系人社会はきわめて多様性に富んでいたと言える。

また、バギオに渡ってきた日系人は未婚の男性が多数を占めていたため、その多くが「イゴロット」と称される北部ルソンの先住民族の女性と結婚した。しかし、そうしたイゴロットと結婚した人々の社会的背景を見てみると、実際には、ベンゲット移民としてやって来た人々や、日本から花嫁を迎えるだけの経済的な余裕がなかった者がほとんどであった。さらに、先住民族と結婚することで、フィリピン公有地法のもとでも「フィリピン人の夫」として土地を利用することができるよう、ひとつの生存戦略として彼女たちと結婚するといったケースも見られた。

以上のような経済的格差や、両親が日本人であるか、あるいはバギオの町やその周辺に住んでいたか否かによって、日系人社会が、実際にはいくつかのグループに分断されたり、差別化されたりしていたことがわかる。しかしそのいっぽうで、ベンゲット移民を先祖にもたない、経済的に豊かな日系人たちにとっても、ベンゲット移民は自分たち日系人たちの象徴・誇りであり、それが「理想化」されて彼らに語られ続けているといった点についても注意が必要である。

ただし、そのような現象とは対照的に、これらの日系人たちによってこれまで語られ、伝えられてきた、ベンゲット道路の完成やその後のバギオの発展に日本人が果たした「役割」や「功績」が、フィリピン人によって書かれた「歴史」に登場することはほとんどなく、ベンゲット移民も一労働者として中国人と併記されるのみであるという事実もまた、フィリピンの日系人の歴史を考えるうえで重要である。

### (2) 日系人と「イゴロット」の関係性

人の移動は新たな境界を造り出し、その移動によって現実となった異質なるものとの遭遇とそれに続く相互作用において、新しい「自己」、新しい「他者」の生成が始まるが、北部ルソンにおいても、日系人の入植によって、他者を排除するもっとも大きな要因のひとつである「人種」を越えて、多くの日系人と他者としてのイゴロットが結婚した。

イゴロットとは、かつてフィリピンを植民地支配したスペインが、北部ルソンに住む人々を、自分たち「文明化された社会」とは

異なる「エキゾチックな他者」として包括した造語・他称であり、そこには幾分、差別的な意味合いが含まれている。

こうしたイゴロットと日系人の関係性を見ると、その手記においては、両者の良好な関係がしばしば語られるが、そのいっぽうでイゴロットにたいする差別的な「まなざし」も散見される。実際には、人種的な差別、あるいは同じ日本人においてさえ社会的な格差にもとづく「他者」認識が行われていた戦前の日本において、バギオの日系人社会もそれは例外ではなく、イゴロットは明らかに自分たちとは異なる「他者」であったに違いない。しかし、その差異を認識しつつもこの地で生きていくための得がたいパートナーして彼女らを捉え、そこに新たな関係を造りだしその境界を越えた、あるいは越えようとした日系人が多くいたことも事実である。ただ、そこに実際にあったであろうさまざまな困難や葛藤、あるいは関係の破綻などといったことが表に出されることはほとんどなく、日系人とイゴロットとの良好な関係や、北部ルソンでの日系人の発展、日系人が残したさまざまな「功績」とともに「理想化されたもの」として語られてきたことは特筆に値する。

しかし、そうした差別を乗り越えやがては日系人とイゴロットの境界の「媒介者」となるはずだった2世も、太平洋戦争で日本がフィリピンを占領したことによって新たな「他者」となり、今度はフィリピン人から差別と迫害を受ける対象となっていった。

(3) 日系人としてのアイデンティティ

北部ルソンに古くから住む先住の人々は、文化人類学者たちによって、その文化や言語等の違いからいくつかの民族グループに分類されている。しかし、よりよい生活を求めて、あるいは海外での成功を求めて北部ルソンへ渡っていった多くの日系人にとっては、彼らが「～族」であるかなどというのはどうでもいいことであり、彼らは、単に、自分たちと異なる「他者」としての「イゴロット」で、ただ一片の布を腰に纏い、自然を崇拝している「蕃人」に過ぎなかった。しかしそのいっぽうで、彼らはこの地で生きていく上での重要なパートナーであり、とりわけ先住民族と結婚した日系人にとっては、家族であり、親族であり、親しい近隣者でもあった。これにたいし、先住民族にとっての日系人は、「他者」として排除すべき異質な存在では決してなく、戸惑いながらもこれらの人々を柔軟に受け入れてきたことが明らかになった。実は、北部ルソンの先住民族社会は、外界から閉ざされ、孤立した「伝統的な社会」などではなく、むしろ、歴史的に開かれた文化的に多様な世界であったことが、このことからわかる。

そして、日系人もまたその多くが先住民族社会の一員として彼らの文化を理解し、受け入れようと努力し、その生活の基盤を築いていった。しかし、日本の敗戦によってその基盤が失われ、その後も激しい反日感情に晒され続けたために、日系人による自身の「アイデンティティ隠し」が行われ、彼らが「日系人であること」が人々からだんだんと忘れられていく。やがて反日感情が薄れていくと、今度は、相互扶助や日本に支援を求める日系人会を組織する動きが、戦後困難な生活を強いられた日系2世を中心に各地でおこり、これによってフィリピン全土の日系人の受難体験が相互認識され、「フィリピン日系人というアイデンティティ」が共有化されることになっていった。ただし、アイデンティティが共有化されるといっても、北部ルソンでは、バギオやその周辺に住んで日本人学校に通い、日系人社会のなかで「日本人」として育った2世と、先住民族社会で育った2世には戦中や戦後の経験において大きな隔たりがあり、概して、後者の生活は他の地域の人々の経験と比べ、さほど困難ではなかったと推察される。そのため、彼らの戦後の経験についての語りでは、いかに日系人として迫害を受けたかではなく、さまざまな戦後の逆境をいかに乗り越え、成功したかが強調されている。

いっぽう先住民族側から見れば、日系人は、日本人を父に持つ2世はもとより、戦後生まれの3世、4世もまた「日本人」であると言う。しかし、それと同様に中国系の2世や3世、4世も「中国人」なのであって、そこに「日本人や中国人の祖先がいる」ということ以外に何らかの他意があるとは思われない。また、彼らのこの地での生活様式を見ても、他の人々と何ら変わることはなく、こうしたことから、彼らの日系人としてのアイデンティティは周囲の他者からのラベリングによるものに過ぎないことがわかる。また、彼らの中には「日本人」としての教育を受けていない者も多く、日本人の父親を失った後も「日本人としての暮らし」がずっと維持されてきたとは思えない。このことからも、これまで日常的に日系人としてのアイデンティが意識されることはなかったと考えられる。彼らは子どもや孫に日本人名をつけたり、日本人の姓を名乗ったりすることに「日系人であること」を表象するのみであって、逆に、その多くが、自分たちは先住民族の「～族である」と認識している。

このように、日系人の歴史において、日本からの出稼ぎ労働者がフィリピンという異国の地で現地の人々と出会い、そこで現地女性を母親とする「複数の属性」を持つ日系人を多く生み出したが、これらの2世たちは歴史に翻弄されながらも、いくつかの属性のなかから自身の社会的、文化的文脈に応じてそのアイデンティティを選択し、変容させてきたことが明らかになった。

以上の考察から、今後の移民研究の展望として、次の3点がフィリピン日系人研究のさらなる課題としてあげられる。

(1) 日系人のアイデンティティの変容
戦後の日系人たちにとって、そのアイデンティティは、日本から支援を受ける上での重要なファクターとして再確認されるようになっていくが、とりわけ 1990 年に改正出入国法が施行され 2 世、3 世とその家族が日本で職種制限なく仕事をできるようになると、「日系人であること」を法的に証明することが彼らにとってきわめて重要な関心となっていく。また、かつて日系人を差別、抑圧した人々のまなざしも、日本への出稼ぎで潤う日系人への羨望へと大きく変わっていくようになる。そうしたアイデンティティの変容や、周囲の環境の変化とアイデンティティの関係についてのさらなる研究が今後の移民問題を考えるうえで必要である。

(2) 日系人としての「世代格上げ」
北部ルソンでは、すでに日系 5 世が誕生しており、確認されているだけでも、2012 年 9 月現在、903 名の 3 世、340 名の 4 世、12 名の 5 世がいる(北ルソン比日友好協会調べ)。このうち 4 世、5 世は、現出入国法では日本へ出稼ぎに行くことができないが、日系 2 世が日本人の親(1 世) の戸籍をもとに自分が戸主になる独立した戸籍を作成すれば法的に「1 世」に格上げされ、その子孫たちについても世代が 1 世代ずつ繰り上げられる。つまり、3 世であっても日本に入国する際には法的には「2 世」扱いとなるということで、現 4 世も 3 世に格上げされ日本への出稼ぎが可能になる。こうした世代格上げは北部ルソンでも多くみられるが、実は、このような動きはフィリピン日系人社会だけで顕著に起きている特異なものであるという。フィリピン移民研究においては、どうして北部ルソンでこのような現象が起き、どのように進み、そして今後、現地にどのような社会的影響をもたらすのかについての詳細な調査も必要となろう。

(3)日系 2 世の記憶の記録
現代社会に生きる私たち日本人にとって、かつてフィリピンにこうした日系人がいたこと、そして彼らがどのような経験をし、今どのような状況に置かれているかを正しく理解することはきわめて重要である。しかし実際には、その情報源としての、戦前バギオに住んでいた日系人や先住民族を母とする日系 2 世の多くがすでに亡くなってしまっており、こうした状況を鑑みれば、フィリピン日系人研究においても、まず当事者の記録を残すことが最優先されなければならないだろう。

これらの課題を踏まえ筆者は、日系 2 世への聞き取り調査を引き続き行うとともに、3 世、4 世のアイデンティの変容についても並行して調査を行っていく予定である。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計 4 件）

① 森谷　裕美子、フィリピン・北部ルソン社会における日系人のアイデンティティ、九州産業大学国際文化学部紀要、査読無、第 57 号、2014、65－85
② 森谷　裕美子、フィリピン北部ルソンにおける日系人と「イゴロット」の関係性、九州産業大学国際文化学部紀要、査読無、第 55 号、2013、95-112
③ 森谷　裕美子、フィリピン北部ルソン日系人社会の歴史的位相、南島史学、査読有、第 79・80 号、2013、144－159
④ 森谷　裕美子、フィリピン北部ルソンにおける日系人、九州産業大学国際文化学部紀要、査読無、第 53 号、2012、107－126


〔学会発表〕（計 1 件）

① 森谷　裕美子、フィリピン北部ルソン日系人社会の歴史的位相、南島史学会、2012 年 11 月 10 日、九州産業大学


６．研究組織
(1)研究代表者

森谷　裕美子（MORIYA, Yumiko）
九州産業大学・国産文化学部・教授
研究者番号：４０２２１７０９